

高校生の仲間集団と学級適応 —仲間集団の排他性と学級雰囲気との関連—

三 島 浩 路*

Friendship and Class Adaptation among High School Students: A Relationship between the Exclusiveness of Friendship and the Class Climate

MISHIMA Kouji

要 約

本研究では、高校生約1,500名を対象に、仲間集団に対する指向性と、仲間関係に関連する学級雰囲気、および仲間関係の良好さや学級適応感に関する調査を行った。収集したデータを分析した結果、離散的な学級雰囲気の強まりが、開放的・親和的な学級雰囲気を損なわせ、仲間関係の良好さや学級適応感を低下させることが示唆された。さらに、「固定的な集団指向」の強まりが離散的な学級雰囲気を強め、離散的な学級雰囲気の強まりが「独占的な親密関係指向」を強め、「独占的な親密関係指向」の強まりが「固定的な集団指向」を強めるという循環的な過程の存在が、女子に関してのみ示唆された。

キーワード：排他性 学級雰囲気 学級適応

1 目 的

本研究では、高校生の仲間集団に対する意識が学級の雰囲気に影響を与え、学級の雰囲気が生徒の仲間集団に対する意識に影響を与えるといった循環的な過程の存在を検証し、学級の雰囲気や仲間集団に対する意識が、学級生活に対する適応感に影響する可能性についても合わせて検討する。

青年期以降、子どもたちは家族と過ごす時間が少なくなり、仲間と過ごす時間が増加したり (e.g., Larson & Richards, 1991; Larson, Richards, Moneta, Holmbeck, & Duckett, 1996)、仲間に対する親密度が高まったりする (e.g., Buhrmester & Furman, 1986; Hunter & Youniss, 1982) など、仲間の影響が増大する。

複数の生徒が結び付き、仲間として一緒に行動す

ることが多い生徒の集団を、本研究では仲間集団とする。三島 (2008) は、同じ仲間集団に所属している親しい仲間と話をしたり、休み時間を一緒に過ごしたりするなどして、仲間集団を固定化しようとする指向性を「固定的な集団指向」とし、極めて親しい特定の仲間との親密な関係を背景に、その関係には属さない第三者に対する排他的な考え方や行動傾向の強さを「独占的な親密関係指向」として、これら2つの因子により仲間集団への指向性が構成されることを示した。

同じ仲間集団に所属する生徒同士で、休み時間を一緒に過ごすなどして、「固定的な集団指向」が強まると、学級集団としてのまとまり以上に、仲間集団としてのまとまりの方が、学級に所属している生徒により強く感じられるようになる。このため、学級として一つにまとまっているという一体感よりも、個々の仲間集団に離散しているという雰囲気をより強く生徒が感じるようになることが予想される

* 中部大学現代教育学部

(Figure 1 のパス①)。

離散的な雰囲気が強まった学級においては、同じ仲間集団に所属している生徒は相互に活発に交流するが、同じ仲間集団に所属していない生徒相互の関係は、相対的により疎遠となり、学級内に存在する仲間集団相互の関係を、学級集団全体としてみた場合には、一つひとつの仲間集団の独立性が強く、仲間集団相互の交流が乏しい状況となると考えられる。そのため、離散的な雰囲気が強まった学級で、既存の仲間集団から排除されると、他の仲間集団に入ることが難しく学級内で孤立する可能性が高まることが予想される。学級内で孤立することは、不快なことである(大嶽、2007)。離散的な雰囲気が強まった学級においては、仲間集団から排除されることを避けようとする傾向が一段と強まり、仲間集団を構成している既存の仲間に対して「独占的な親密関係指向」を強めることが予想される(Figure 1 のパス②)。

「独占的な親密関係指向」を強めることは、仲間集団をより固定化させることとなるために、「固定的な集団指向」をさらに強める結果となることが予想され(Figure 1 のパス③)、仲間関係に対する指向性と学級の離散的な雰囲気との間に循環的な過程が形成されることが予想される(Figure 1)。

本研究では、「固定的な集団指向」が学級の離散的な雰囲気に影響を与え、離散的な雰囲気が、「独占的な親密関係指向」を強めることにより、「固定的な集団指向」が強まるという循環的な過程の検証を試みる。

ところで、仲間集団に対する「固定的な集団指向」や「独占的な親密関係指向」は、生徒の学級生活に対する適応感にどのような影響を与えるのだろうか。

か。

三島(2012)が小学5・6年生約1,400名を対象に行った調査の結果、女子児童の「独占的な親密関係指向」が、学級適応感を低下させることが示唆された。しかし、中学生に関しては、「独占的な親密関係指向」が学級適応感を低下させることを示唆する結果は得られなかった(三島・橋本、2011)。そこで、高校生に関しても、小学校高学年女子のように、「独占的な親密関係指向」が学級適応感に負の影響を与えるのかどうかを検証する(Figure 2 のパス④)。

「固定的な集団指向」の強さは、仲間集団を形成している仲間との関係の固定化を望む強さを示すものである。関係の固定化を強く望むということは、仲間との関連が良好であると予想されることから、「固定的な集団指向」と、仲間関係の良好さとの間には、正の関連があることが予想される(Figure 2 のパス⑤)。良好な関係にある親しい仲間をもつことは、学校生活に対する適応感を高めることが多くの研究によって支持されている(e.g., Garnefski & Diekstra, 1996; Pope, A. W., McHale, S. M., & Craighead, W. E., 1988)ことから、仲間関係の良好さは学級生活に対する適応感に正の影響を与えることが予想される(Figure 2 のパス⑥)。

仲間集団に対する指向性が学級生活に対する適応感に影響することに加え、学級の雰囲気も、仲間関係に関連する適応状況をはじめとした学級生活への適応感に影響を与えることが予想される。

伊藤・松井(2001)は、「他の人と一緒にならないグループがある」、「グループ同士の対立はない(反転)」などの項目により測定された「学級内の不和」の程度と、「学級への満足感」との間に大きな負の相関があることを報告している。学級の離散的な雰囲気

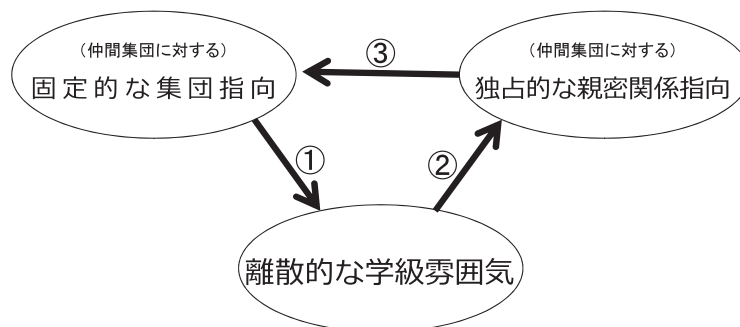


Figure 1 仲間集団に対する指向性と学級雰囲気の関連

気が強まれば、個々の仲間集団の「独占的な親密関係指向」が強まるだけでなく、学級の開放的・親和的な雰囲気が増え、学級の開放的・親和的な雰囲気が損なわれることも予想される（Figure 2 のパス⑦）。小野寺・河村（2002）は、中学生を対象にした調査を行い、「学級全体」に対する自己開示が高い生徒ほど、学校生活満足感が高く、仲間との関係や学級との関係、教師との関係がより良好であるという結果を得た。生徒が自己開示しやすい学級とは、だれとでも自由に話ができる雰囲気があり、学級としての一体感がある学級であり、こうした学級のもつ雰囲気を、開放的・親和的な雰囲気とする。開放的・親和的な雰囲気は、生徒の自己開示を高める可能性があることから、仲間関係の良好さや学級適応感に正の影響を与えることが予想される（Figure 2 のパス⑧⑨）。

以上のような考えを Figure 2 に示したモデルにまとめた。本研究では、このモデルの妥当性に関しても検討する。

2 方法

- (1) 調査時期：2011 年 10 月
- (2) 対象：A 県内の 13 校に在籍する高校生 1,678 名を対象に調査を行い、すべての設問に回答した 1,483 名（男子 675 名・女子 808 名。1 年生 597 名 2 年生 441 名 3 年生 445 名）のデータを分析した。
- (3) 質問紙の構成

以下の項目について 5 件法で回答する形式の質問紙を使用した。

■仲間集団指向性 「仲間集団指向性尺度」（三島、

2008）を参考にして作成した「固定的な集団指向」に関する 7 項目（例：修学旅行や体験学習・遠足では、親しい仲間だけで一つのグループをつくりたい。仲の良い友人だけで、かたまって一緒にいると楽しい）、「独占的な親密関係指向」に関する 8 項目（例：自分のいちばん大切な友人を、ほかの子にとられそうで心配になることがある。新しい友人をつくるとき、今、仲良くしている友人のことが気になる）の合計 15 項目を用いた。

■学級雰囲気 伊藤・松井（2001）が開発した「学級風土質問紙」を参考にした。一つひとつの仲間集団の独立性が強く、仲間集団相互の交流が乏しいという離散的な学級の雰囲気を測定するために、「クラスの中に、ほかの人と一緒にいたがらない『（仲良し）グループ』がある」「クラスのみならず、『（仲良し）グループ』に分かれている」の 2 項目を用いた。学級としての一体感があり、だれとでも自由に話ができる開放的・親和的な学級の雰囲気を測定するために、「このクラスは、全員がよくまとまっている」「このクラスで、新しい友人をつくるのは難しい（反転）」「このクラスには、だれとでも自由に話ができる雰囲気がある」の 3 項目を用いた。

■学級適応感 「階層型学級適応感尺度」（三島、2006）の「総合的適応感覚」に関する 3 項目（学校に来るのは楽しい。学校が休みの日は、たいくつだ。学校に行きたくないと思うことがある（反転））と、仲間（友人）関係に関連する適応状況をとらえる 3 項目（例：困ったことがあったら、友だちに相談する。友だちには、自分の秘密など何でも話することができる）の合計 6 項目を用いた。

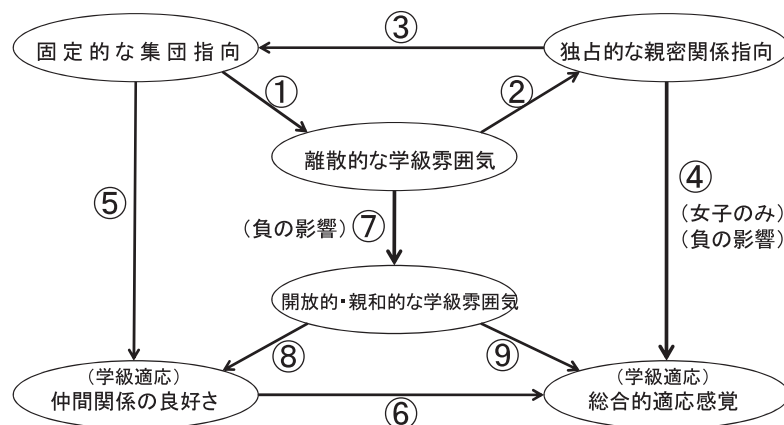


Figure 2 仲間集団指向・学級雰囲気と学級適応感の関連

3 結 果

(1) 分析に用いる項目の選定

■仲間集団指向性

仲間集団指向性に関連する15項目について探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った（Table 1）。固有値の推移（3.52 → 1.99 → 1.40 → 0.99 → ……）及び、仲間集団指向性が2因子構造であるという先行研究（三島、2008）の結果から2因子解を採用した。一つの因子に対する負荷量が0.3以上あることを基準に項目の選定を行った。その結果、第1因子に関しては10項目、第2因子に関しては4項目を用いることとなった。この14項目で検証的因子分析を行った結果、適合度を示す値は $GFI=.93$ 、 $AGFI=.90$ 、 $CFI=.83$ 、 $RMSEA=.078$ であった。そこで、それぞれの因子に対する負荷量が小さい6項目（F1: h7, h5, g7, g8, g6, F2: g4）を除外した結果、適合度が改善したこと（ $GFI=.98$ 、 $AGFI=.96$ 、 $CFI=.96$ 、 $RMSEA=.062$ ）、第1因子に関しては、この5項目の内容をもとに「固定的な集団指向」因子と解釈した。第2因子に関しては、項目 G4 を除いた3項目の内容をもとに「独占的な親

密関係指向」因子と解釈した。

■学級雰囲気

「学級雰囲気」に関する5項目について探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った（Table 2）。固有値の推移（2.35 → 1.00 → 0.70 → ……）及び、解釈可能性の高さから2因子解を採用した。検証的因子分析を行った結果、適合度は許容できる範囲であった（ $GFI=.98$ 、 $AGFI=.94$ 、 $CFI=.97$ 、 $RMSEA=.095$ ）。第1因子を「開放的・親和的な学級雰囲気」因子、第2因子を「離散的な学級雰囲気」因子と解釈した。

■学級適応感

「学級適応感」に関する6項目について探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った（Table 3）。固有値の推移（2.53 → 1.22 → 0.84 → ……）及び、解釈可能性の高さから2因子解を採用した。検証的因子分析を行った結果、比較的良好な適合度を示した（ $GFI=.98$ 、 $AGFI=.96$ 、 $CFI=.97$ 、 $RMSEA=.071$ ）。第1因子を「仲間適応」因子、第2因子を「総合的適応感覚」因子と解釈した。

(2) 下位尺度得点の性差

それぞれの因子の解釈に用いた項目の素点の平均

Table 1 仲間集団指向性に関する15項目の因子分析結果

内 容	第1因子	第2因子
h6 修学旅行や体験学習・遠足では、親しい仲間だけで一つのグループをつくりたい	.62	.03
h4 学校で、休み時間に話をしたりして遊ぶ相手は決まっている	.60	-.01
h2 仲の良い友人だけで、かたまって一緒にいると楽しい	.59	-.16
h3 実験・実習などグループで行う学習は、親しい仲間だけで一つのグループをつくりたい	.53	.08
h1 仲間と話をする方が、仲間ではない子と話をするよりも楽しい	.48	.00
g6 仲良しの仲間と内緒話をしたことがある	.48	.06
g8 親しい仲間と一緒に学校のトイレに行くことがある	.47	.03
g7 親しい仲間とメールのやり取りをする	.34	.12
h5 自分の気持ちの中で、親しい友人とそれ以外の相手とを分けている	.31	.13
h7 遊び相手がいつも同じだとつまらない	-.30	.24
g5 自分のいちばん大切な友人を、ほかの子にとられそうで心配になることがある	-.01	.86
g2 自分のいちばん大切な友人が、ほかの子と楽しそうに話をしているのを見ると、嫌な気分になる	-.07	.72
g1 新しい友人をつくる時、今、仲良くしている友人のことが気になる	.08	.49
g4 親しい友人と同じ文房具を持ったり、同じような服装をしたりしたい	.19	.38
g3 朝、学校に来るとき、学校の最寄りの駅や校門などで、友人と待ち合わせることがある	.19	.12
第1因子との因子間相関		.25

※ 記号はFigure 3-6の測定変数を示す。

Table 2 学級雰囲気に関する5項目の因子分析結果

内 容	第1因子	第2因子
k4 このクラスには、だれとでも自由に話ができる雰囲気がある	.94	.09
k1 このクラスは、全員がよくまとまっている	.62	-.09
k2 このクラスで、新しい友だちをつくるのはむずかしい	-.45	.19
k3 クラスの中に、ほかの人と一緒にいたがらない「仲良しグループ」がある	-.00	.73
k5 クラスのみんなは、「仲良しグループ」に分かれている	-.06	.43
第1因子との因子間相関		-.51

※ 記号はFigure 3-6の測定変数を示す。

Table 3 学級適応感に関する6項目の因子分析結果

内 容	第1因子	第2因子
b2 友だちには、自分の秘密など何でも話することができる	.84	-.08
b1 困ったことがあったら、友だちに相談する	.77	.00
b3 友だちから自分は大切にされている	.52	.10
a1 学校に来るのは楽しい	.11	.77
a3 学校に行きたくないと思うことがある	.09	-.71
a2 学校が休みの日は、たいくつだ	.01	.31
第1因子との因子間相関		.46

※ 記号はFigure 5・6の測定変数を示す。

Table 4 下位尺度得点の男女別平均とS.D.

内 容	男子 $n=675$	女子 $n=808$	t 値 ($df=1481$)	p
	平均値 (S.D.)	平均値 (S.D.)		
総合的適応感覚 尺度得点	2.97(0.81)	2.89(0.80)	1.91	
仲間適応 尺度得点	3.21(0.82)	3.48(0.77)	6.50	***
固定的な集団指向 尺度得点	3.53(0.67)	3.59(0.63)	1.52	
独占的な親密関係指向 尺度得点	1.82(0.72)	2.13(0.72)	8.08	***
開放的・親和的な学級雰囲気 尺度得点	3.52(0.79)	3.47(0.81)	1.14	
離散的な学級雰囲気 尺度得点	2.98(0.81)	3.12(0.81)	3.48	**

*** $p < .001$ ** $p < .01$

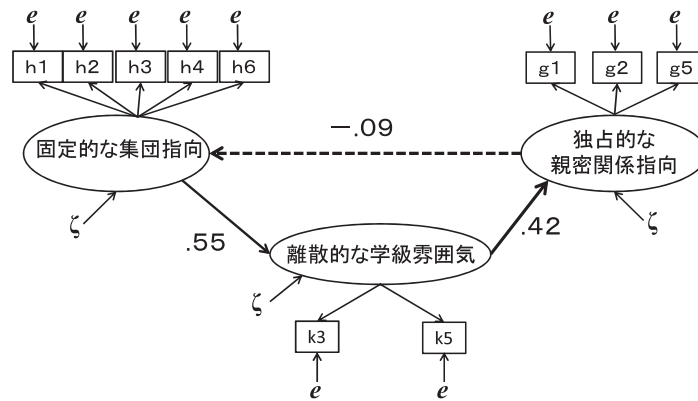
値を算出して下位尺度得点とした。下位尺度得点の平均値等を男女別に求めて比較した (Table 4)。その結果、学級適応感に関連する「仲間適応」尺度得点、仲間集団指向性に関連する「独占的な親密関係指向」尺度得点、および「離散的な学級雰囲気」尺度得点は、男子に比べて女子の方が有意に大きな値を示した。そのため、以降の分析は男女別に行うことにした。

(3) Figure 1 に示した循環的な過程の検証

Figure 1 に示した変数の関連をもとにして

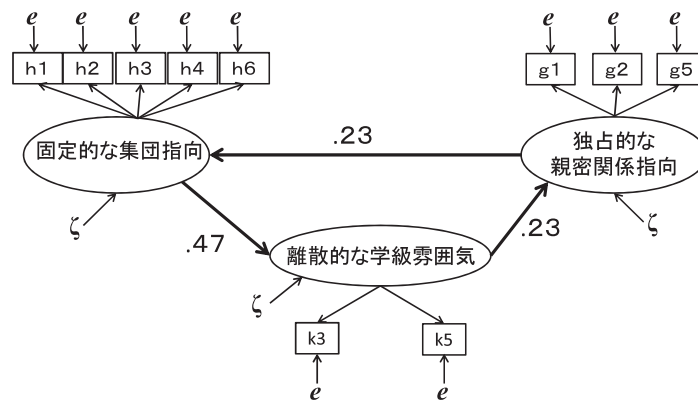
Figure 3・4 のモデルを作成し、多母集団同時分析による共分散構造分析を行った結果、データに対するモデルのあてはまりはおおむね良好であった ($GFI = .96$, $AGFI = .93$, $CFI = .91$, $RMSEA = .052$)。女子のモデル (Figure 4) のパス係数はすべて有意な水準であったが、男子のモデル (Figure 3) の「独占的な親密関係指向」因子から「固定的な集団指向」因子へのパスは有意な水準のものではなかった。

以上の結果は、Figure 1 に示した循環的な過程は、女子高校生に関してはみとめられるが、男子高



(実線は有意なパス ($p<.01$) 破線は有意ではないパス)

Figure 3 仲間集団指向性と学級雰囲気の関連 (男子)



(実線は有意なパス ($p<.01$) 破線は有意ではないパス)

Figure 4 仲間集団指向性と学級雰囲気の関連 (女子)

校生に関してはみとめられないことを示唆している。

(4) 仲間集団指向性・学級雰囲気と学級適応感との関連

Figure 2 に示した学級適応感と仲間集団との関係を検証するために Figure 5・6 のモデルを作成し、多母集団同時分析による共分散構造分析を行った結果、データに対するモデルのあてはまりはおおむね良好であった ($GFI=.92$ 、 $AGFI=.90$ 、 $CFI=.89$ 、 $RMSEA=.046$)。

「独占的な親密関係指向」因子から「総合的適応感覚」因子へのパスは、男女ともに有意な水準ではなかった。高校生に関しては、仲間に対する独占的な親密関係指向が、学級生活に対する楽しさの程度を示す総合的適応感覚に影響を男女ともに与えないことを示唆している。

「仲間適応」に関しては、仲間集団指向性を構成す

る因子の一つである「固定的な集団指向」と、学級の雰囲気を示す「開放的・親和的な学級雰囲気」の双方からのパスが、男女ともに有意な水準のものであった。身近な親しい仲間により形成される仲間集団に対する意識と、所属学級の雰囲気とが、「仲間適応」に影響を与えることをこの結果は示唆している。

4 考察

(1) 仲間集団指向性・学級雰囲気の関連にみられた性差

「固定的な集団指向」を強めることが、「離散的な学級雰囲気」を強め、「離散的な学級雰囲気」の強化が、「独占的な親密関係指向」を強めるという Figure 1 に示したプロセスの一部が、男女に共通して成り立つことを支持する結果が得られた。しかし、「独占的な親密関係指向」の強化が「固定的な集

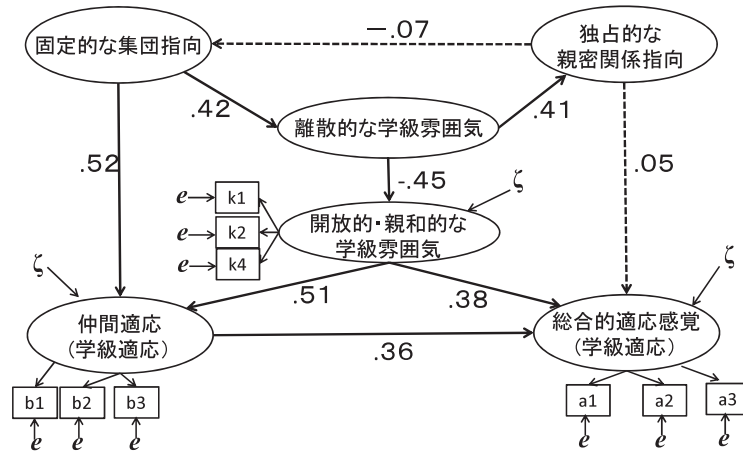


Figure3のモデルにある潜在変数の測定変数等の表記は省略
(実線は有意なパス ($p < .05$) 破線は有意ではないパス)

Figure 5 仲間集団指向性・学級雰囲気と学級適応感の関連 (男子)

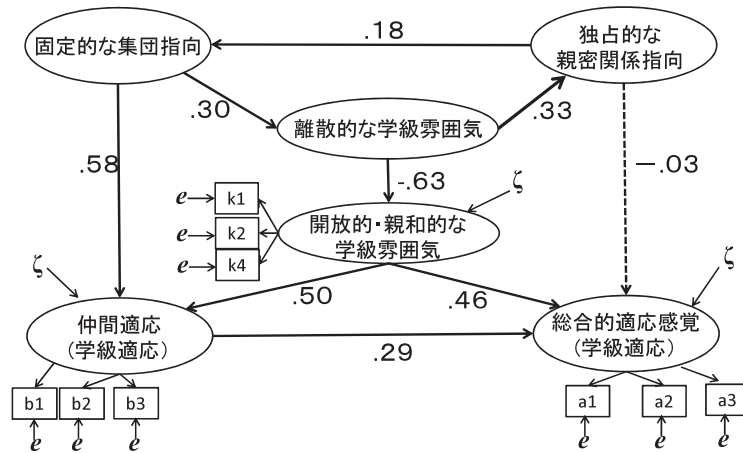


Figure4のモデルにある潜在変数の測定変数等の表記は省略
(実線は有意なパス ($p < .05$) 破線は有意ではないパス)

Figure 6 仲間集団指向性・学級雰囲気と学級適応感の関連 (女子)

団指向」の強化につながることを支持する結果は男子にはみられず、女子に関してのみみられた。男女間のこうしたちがいの背景について考察する。

Culotta & Goldstein (2008) は、青年期において、社会的な不安や嫉妬は男子以上に女子の方が強く、その原因として、友人関係の重要性の違いがあると述べている。また、青年期の女子は、他者の不安や他者の気分の影響をより強く受けやすい (Field, Kolbert, Crothers, & Hughes, 2009)。こうしたことから、男子に比べて女子の方が、仲間に対する心理的な関与の度合いや重要性がより大きいと考えられる。

Baumeister & Dwall (2005) は、重要な関係にある者から拒絶される方が、そうした関係にない者から拒絶された場合に比べて、ダメージが大きいこと

を指摘している。Leary (2005) は、相手から一定の水準で拒絶され続けている場合に比べ、拒絶のされ方が強まっていった場合の方が、拒否されることによって生じる問題が多いと述べている。普段から拒絶されていると感じる相手との関係に比べ、親密な仲間との関係は、拒絶されることが少ない関係である。しかし、あるとき突然、親密な仲間から拒絶された場合、Leary (2005) の指摘から考えれば、普段から拒絶されていると感じる相手からの拒絶に比べ、心理的なダメージはより大きい。さらに、拒絶されたと感じるのは、相手が積極的に拒絶した場合だけではなく、電話をしたのに返事がないなど、相手との関係の深さに応じて期待される対応を相手が取らなかった場合も含まれる (Leary, 2005)。親密な関係にある仲間に対しては、それ以外の者に比べ

て、相手の反応に対する期待がより大きくなり、そうした大きな期待に相手が応えない場合、拒絶感を覚えることもある。

女子の方が、仲間に対する心理的な関与の度合いや重要性がより大きいことと、Baumeister & Dewal (2005) や Leary (2005) の指摘を合わせて考えれば、仲間集団から排斥されることにより生じるダメージは、女子の方が大きいと考えられ、仲間集団から排斥されないことを目的とした行動は、女子の方がとりやすい。「独占的な親密関係指向」を強めた女子は、排斥されることに対する警戒がより強い女子であるとも考えられ、排斥されることに対する警戒から、自分たちの仲間集団の「固定的な集団指向性」を強めた可能性がある。「独占的な親密関係指向」が「固定的な集団指向」に影響を及ぼす過程について、仲間から排斥されることへの不安という要因の影響の有無を含め、今後、さらに研究していく必要がある。

(2) 仲間適応に影響を与えた二つの要因

「仲間適応」に関しては、仲間集団指向性の「固定的な集団指向」と「開放的・親和的な学級雰囲気」の双方が影響を与えた。「固定的な集団指向」の強さは、仲間集団を形成している仲間との関係の固定化を望む強さを示し、関係の固定化を強く望むということは、仲間との関連が良好であると予想されることから、「固定的な集団指向」と、仲間関係の良好さとの間には、正の関連があることは容易に想像できる。しかし、「開放的・親和的な学級雰囲気」が、「固定的な集団指向」と同程度に、「仲間適応」に影響を与えることが本研究の結果から示唆された。

「開放的・親和的な学級雰囲気」が、こうした強い影響を「仲間適応」に与えた背景について考察する。

幸福にとって何が必要かを Berscheid (1985) が尋ねたところ、「家族や仲間との関係が最も重要」と、回答者の大多数が答えているように、仲間との関係は、家族との関係と同じくらい重要であり、対人的な絆や社会的承認を求めるのは、空腹を避けるぐらい基本的な欲求である (e.g., Harlow & Harlow, 1973)。対人的な絆や社会的承認が得られないとき、人は孤独を感じる。人が感じる孤独は、時間的にどれだけ長く関わり合ったかという対人相互作用の量

的な側面や、社会的ネットワークの大きさとの関連は小さく、関係の質による影響が大きい (e.g., Green, Richardson, Lago, & Schatten-Jones, 2001; Hawkly, Burleson, Berntson, & Cacioppo, 2003)。

「開放的・親和的な学級雰囲気」に満ちている学級においては、自分が所属する仲間以外の学級成員ともかかわり合いやすく、こうした学級に所属している生徒は、同じ仲間集団に所属する特定の生徒からだけでなく、それ以外の多くの生徒からも大切にされていると感じたり、困ったことが生じたときに学級内の多くの生徒が相談にのってくれたりする可能性が高い。そのため、自分が所属している仲間集団から排斥されても、学級内で孤立して孤独を感じる可能性が低いことから、「開放的・親和的な学級雰囲気」が「仲間適応」に影響を与えた可能性がある。

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(C)課題番号 21530707）の助成を受けた。

文 献

- Baumeister, R. F., & DeWall, C. N. (2005). The inner dimension of social exclusion: Intelligent thought and self-regulation among rejected persons. In K. Williams, J. Forgas, & W. Von Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*. pp. 53-73. New York: Psychology Press.
- Berscheid, E. (1985). Interpersonal attraction. In G. Lindzey & E. Aronson (Eds.), *The handbook of social psychology (3rd ed.)*, pp. 413-484. New York: Random House.
- Buhrmester, D., & Furman, W. (1986). The changing functions of friends in childhood: A neoSullivanian perspective. In V. J. Derlega & B. A. Winstead (Eds.), *Friendship and social interaction*. pp. 41-62. New York: Springer-Verlag.
- Culotta, C. M., & Goldstein, S. E. (2008). Adolescents' aggressive and pro-social behavior: Associations with jealousy and social anxiety. *Journal of Genetic Psychology*, 169(1), 21-33.
- Field, E. J., Kolbert, J. B., Crothers, L. M., & Hughes, T. L. (Eds.) (2009). *Understanding girl bullying and what to do about it: Strategies to help heal the divide*. Thousand Oaks, CA: Sage.

- Garnefski, N., & Diekstra, R. F. W. (1996). Perceived social support from family, school, and peers: Relationship with emotional and behavioral problems among adolescents. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **35**, 1657-1664.
- Green, L. R., Richardson, D. S., Lago, T., & Schatten-Jones, E. C. (2001). Network correlates of social and emotional loneliness in young and older adults. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 281-288.
- Harlow, H. F., & Harlow, M. K. (1973). Social deprivation in monkeys. In: WT, Greenough Compiler editor. *The nature and nurture of behavior: Readings from the Scientific American*. pp. 108-116. San Francisco: Freeman.
- Hawkley, L. C., Burleson, M. H., Berntson, G. G., & Cacioppo, J. T. (2003). Loneliness in everyday life: Cardiovascular activity, psychosocial context, and health behaviors. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 105-120.
- Hunter, F. T., & Youniss, J. (1982). Changes in functions of three relations during adolescence. *Developmental Psychology*, **18**, 806-811.
- 伊藤亜矢子・松井 仁 (2001). 学級風土質問紙の作成 教育心理学研究、**49**、449-457.
- Larson, R., & Richards, M. H. (1991). Daily companionship in late childhood and early adolescence: Changing developmental contexts. *Child Development*, **62**, 284-300.
- Larson, R., Richards, M. H., Moneta, G., Holmbeck, G., & Duckett, E. (1996). Changes in adolescents' daily interactions with their families from ages 10 to 18: Disengagement and transformation. *Developmental Psychology*, **32**, 744-754.
- Leary, M. R. (2005). Varieties of interpersonal rejection. In K. Williams, J. Forgas, & W. Von Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*. pp. 35-51. New York: Psychology Press.
- 三島浩路 (2008). 仲間集団指向性尺度の作成：小学校高学年用 カウンセリング研究、**41**、129-135.
- 三島浩路 (2012). 小学生の仲間集団と学級適応：仲間集団の排他性と学級雰囲気との関連 応用心理学研究、**38**、114-121.
- 三島浩路・橋本秀美 (2011). 中学生の友人関係と学級適応：仲間集団の排他性と学級風土との関連 中部大学現代教育学研究紀要、**4**、13-20.
- 小野寺正己・河村茂雄 (2002). 中学生の学級内における自己開示が学級への適応に及ぼす効果に関する研究 カウンセリング研究、**35**、47-56.
- 大嶽さと子 (2007). 「ひとりぼっち回避規範」が中学生女子の対人関係に及ぼす影響：面接データに基づく女子グループの事例的考察 カウンセリング研究、**40**、267-277.
- Pope, A. W., McHale, S. M., & Craighead, W. E. (1988). *Self-esteem enhancement with children and adolescents*. Pergamon Press. (ポープ A. W.・ミッキヘイル S. M.・クレイグヘット W. E. 高山巖 (監訳) (1992). 自尊心の発達と認知行動療法—子どもの自信・自立・自主性をたかめる— 岩崎学術出版社)

受付日：2012 年 9 月 28 日

受理日：2012 年 10 月 22 日

Abstract

This study examined the directivity toward the peer group, class climates related to friendship, the state of friendship, and class adaptation on approximately 1,500 high school students. As a result of the analysis, it was found that if a class climate become more discrete, the climate would become less open and familiar, decreasing the state of friendship and class adaptation. Furthermore, the following results were obtained only among female students: A discrete class climate was strengthened by the “directivity toward fixed groups”, and a discrete class climate consequently strengthened the “directivity toward monopolized friendship”. Moreover, the “directivity toward monopolized friendship” strengthened the “directivity toward fixed groups” in turn, implying that such a circulative process may actually exist.

[Keywords] exclusiveness, class climate, class adaptation,